



Ring-necked Pheasant

コウライキジ(メス)

ぼろり家族⑦／落合由利子 2
おだんご先生の親子でつくろう！季節の和菓子①／芝崎本実 3
保育のこれまで、これから／近藤幹生 4
新刊紹介／石川文洋 6
／片岡明美 7
読者からのお便り 7

イラスト／鈴木まもる

幼稚園のころ

竹下文子

.....

子どものころに住んでいたところは、道路をはさんですぐ目の前が幼稚園で、通うには30秒もかからなかった。入園の日のことを覚えている。小さい仕切りにひらがなで名前が書いてある下駄箱。名前の横に貼られたシールは、花だったり動物だったり、ひとりひとり違うのだ。わたしのは赤とんぼだった。もうひらがなは読めたけれど、そこに書かれた名前はなんだかよそよそしく自分のではないみたいに見え、これを覚えなきゃいけないのだな、間違えてはいけないのだな、と緊張しきって赤とんぼを見つめていた。

たぶん「近いから」という理由でそこに入れられたのだろう。お寺の経営する園で、黒い法衣の「おしょうさん」が園長で、薄暗い感じの本堂で「のんの ののさま ほとけさま」という歌を毎朝うたわされた。近所にはもうひとつ教会の幼稚園もあった。そこに通う子が持っている天使の絵のカードがうらやましくてたまらず、わたしもあっちの園ならよかったのに、といつも思っていた。

本当はそもそも幼稚園になんか行きたくはなかったのだ。卒園までの2年間、先生に一言も口をきかなかっただけから、筋金入りの人見知りの内弁慶なのである。先生の合図で他の子と手をつないでグループを作るゲームが苦手で、いつもひとりだけ余ってしまう。先生のピツと吹く笛の音が怖い。器楽合奏のとき、後ろの男の子が力まかせに叩くタンバリンが怖い。お弁当のおかず入れのかたくて開かない留め金も、うちと違う和式のお手洗いも、運動会の障害物競走の平均台も、みんな怖くて息が詰まりそうになる。

すべてを埋め合わせてくれるのが本だった。ひとりで黙って本を読んでいてもいいなら、幼稚園は楽しいところだった。半世紀以上たっても、わたしの中にはあこのころのわたしがいて、その子が作品を書かせてくれているのだと思う。

思いついてグーグル地図で調べてみたら、幼稚園は今も同じ名前と同じ場所にあった。園舎は木造平屋からコンクリート2階建てに変わっていたけれど、本堂からコの字に庭を囲むかたちがそのままだ。ふりむけば道の向こうには、ジャンパースカートの制服でおかっぱ頭のわたしが、真面目な顔をして立っているかもしれない。

(たけした ふみこ／童話作家)

おだんご先生の 親子でつくろう！

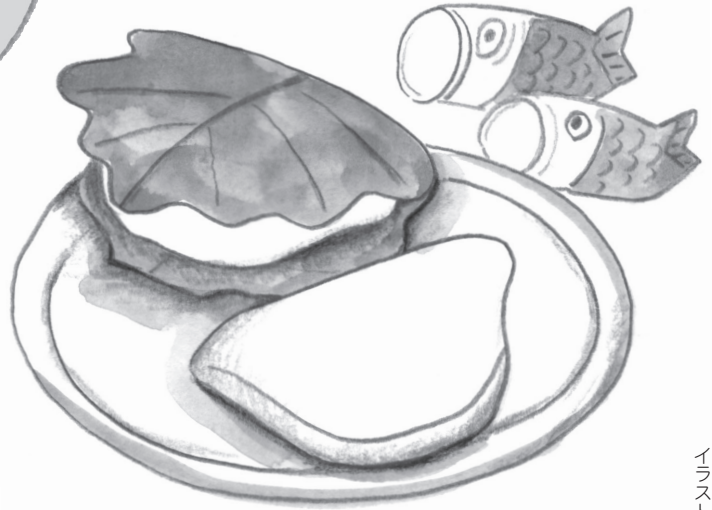
季節の和菓子①

かしわもち

芝崎本実

●材料(6個分)

- 上新粉 140g
- ぬるま湯(45℃くらい) 125cc
- 白玉粉 12g
- 水 15cc
- こしあん(固めのもの) 120g
- 柏の葉 6枚



イラスト／二木ちかこ

しばさき もとみ / 管理栄養士。大学で教えながら、「おだんご先生」として、和菓子の魅力を発信。「おだんご先生のおいしい! 手づくり和菓子」も発売中。

青空の下、楽しそうに遊ぶ子どもたち。端午の節句のかしわもちには、子どもを見守る親心がつまっています。

●作り方

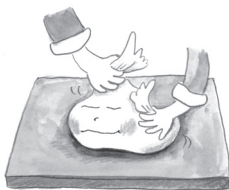
マークの手順は、ぜひ親子でいっしょに!

① ボウルに上新粉を入れ、ぬるま湯を2回に分けて加え、ゴムべらや木べらでよく混ぜる。

② 固く絞ったさらし布巾を蒸し器に敷き、①を火が通りやすいよう小分けにして並べ、強火で15分蒸す。

③ 別のボウルに白玉粉を入れ、水を2回に分けて加え、手で混ぜる。

④ ②を布巾ごと取り出す。さわれるまで冷めたら、布巾のはしを持って、生地を中央へ折りたたむように混ぜる。



アツアツなので、必ず大人がやってね。ふたを取る時の蒸気にも注意!

⑤ まとめた生地をボウルに移し、③を少しずつ加え、手でよくこね混ぜ、6つに分ける。

手がベタベタになったら、洗って再トライしてね!

⑥ 生地をてのひらで小判形に広げ、6つに分けて丸



めたあんを手前にのせる。奥から生地を折りたたみ、手で軽く押さえて口を閉じ、半円形にする。

⑦ 蒸し器に再度さらし布巾を敷き、⑥を並べて強火で7分蒸す。

⑧ 一度ふたを取って蒸気を逃がすと、なめらかになるよ。

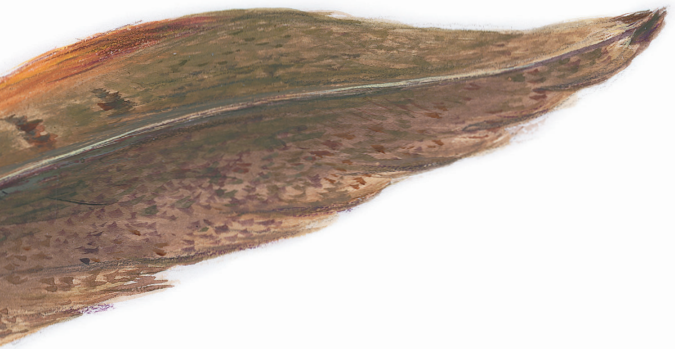
一度ふたを取って蒸気を逃がすと、なめらかになるよ。

★次回は、夏にぴったりのくずきりです。

●豆知識

新しい葉が出るまで古い葉を落とさないことから、柏の葉には子孫繁栄の願いが込められています。西南日本では柏のかわりにサンキライの葉で包みます。端午の節句に食べるお菓子は、もちを笹の葉で包んだ関西の「ちまき」など、地域によって異なります。

保育の これまで、 これから



Ring-necked Pheasant

待機児童が社会の大きな問題となり、保育園・幼稚園が一体化した「こども園」が登場するなど、日本の保育園・幼稚園は転換点を迎えています。日本の保育・幼児教育の歴史を振り返って、保育にとって重要なことを改めて考えてみたいと思います。

保育園のはじまり

かつての日本では、幼子を背負いながら、学校に通う子どもの姿（子守学校）が、全国のさまざまな地方で見られました。現在の私たちが妹や弟を背負って学校へ通う子どもたちの姿を想像することは難しいですが、場所によっては昭和初期まで続きました。こうした子守学校において、背負われた幼児のための保育施設が誕生したことが知られています。たとえば明治二十年代に誕生した、新潟県静修学校附設の託児所がそのひとつです。明治五年の「学制」によって、日本では小学校への就学が義務づけられましたが、簡単なことではありませんでした。

農家の子どもは、子守や家の雑事の重要な担い手だったので、子どもを学校へやることは、農家にとっては働き手を奪われることでした。学校焼き討ち事件まで起こるような状況の中で、やむをえず、幼子を背負い学校に通う子守学校が、あちこちに生まれました。当時の教師たちは、生徒や背中で泣く乳幼児にもまなざしを注ぎ、工夫を凝らして授業をすすめたようです。それがやがて保育施設の誕生にもつながったのです。

大正時代には、工場で働く人が増え、都市部では工場附設の託児所がつくられ

農家地域では、農繁期の季節保育所などが生まれました。こうした戦前の保育園は、託児所と呼ばれ、内務省が管轄していました。

日本最初の幼稚園

一方、日本最初の官立（現国立）幼稚園として開始されたのは、明治九年の東京女子師範学校附属幼稚園です。ドイツで一八四〇年に幼稚園（キンダーガルテン）を創設した幼児教育思想家フレーベルの考え方が、アメリカを経て日本に移入されました。しかし、当時、幼稚園に通っていたのは、富裕層の子どもたちでした。明治十一年の飛鳥山の遠足では、幼児それぞれに付添人がついていて、みな馬車に乗っていたそうです。園には大きな「供待ちの室」もありました。園児や保育者も、豪華な洋装をしていましたが、カラー写真などで残されています。管轄する文部省は、労働者の子どもも入れるように簡易幼稚園を奨励しましたが、富裕層のための施設というイメージが強く、幼稚園の数はなかなか増えませんでした。明治期後半から大正期になって、公立幼稚園だけではなく、仏教、キリス

ト教などの宗教立幼稚園や私立幼稚園も各地に生まれていきました。

ともに百三、四十年前ごろに始まった保育園と幼稚園ですが、その姿はだいぶ異なっていたことがわかります。このルーツの違いが、幼児二元化として、現在にまでつながっています。

平和を誓った再スタート

日本の保育・幼児教育はその後、大正期の自由主義教育（リトミックなど）や絵本・紙芝居といった児童文化などへ展開しますが、戦争によって子どもたちの状況は悪化していきます。第二次世界大戦末期には、本土空襲のなかで幼稚園や保育園は閉鎖され、親たちと離れる疎開保育や戦時託児所を経験します。一九四五年三月十日の東京大空襲では、乳幼児・親・保育者たちを含む、約十万人とも言われる犠牲者を出しました。

戦後、保育園・幼稚園は、平和憲法と、児童福祉法や学校教育法のもとで再スタートします。そこには、多くの子どもやその家族の命が失われたことに対する深い反省と痛切な教訓、そして再び戦争に巻き込まれることのない平和な社会へ

近藤幹生

こんどう みきお／白梅学園大学学長。各地で保育園の園長を務めたのち、大学で教鞭をとる。おもな著書に「保育とはなにか」（岩波新書）「保育園」改革のゆくえん」（岩波ブックレット）、共著に「どう変わる？ 何が課題？ 現場の視点で新要領・指針を考えよう」「実践につなぐことばと保育」（ともにひとなる書房）「保育の哲学」シリーズ（ななみブックレット）など多数。

の決意が込められています。保育・幼児教育の基盤となったのは、すべての子どもたちが、心身ともに健やかに育成され、能力に応じて教育を受けられる機会が与えられ、尊厳が守られるようにという理念です。

一九六〇年代から七〇年代の高度経済成長期には、保育園・幼稚園はともに増加します。女性の社会進出とともに保育需要が広がり、八〇年代前半には、ほぼ近年と同じ保育園数、幼稚園数にまでなりました。しかし、八九年の合計特殊出生率「一・五七ショック」から少子化の



イラスト／鈴木まもる

危機が叫ばれるようになると、子育て支援策や少子化対策が次々と打ち出されてきました。しかし、共働き世帯が増える一方で、待機児童問題に確かな見通しをもてている現状とは言えません。

子どもの利益をいちばんに

「一・五七ショック」と同じ一九八九年、国連は児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）を制定し、日本は九四

年に批准しました。この条約の中で、私たちが最も大切だと思っているのが、「子どもにとって最善の利益を保障する」ということです。

それは、大人の都合や考えに合わせるのではない、ということのほかに、保育の現場では、特にふたつの視点が重要だと考えています。ひとつは、ことばや文字を獲得する以前の〇歳児や、ハンディをもつ子どもを含めて、すべての子どもがそれぞれに願いや思いをもっていることを理解し、表情や声、しぐさから、それをつかむことに全力投球すること。もうひとつは、子どもにとって最善の利益を守るためには、最終的な成果だけでなく、失敗したりくじけずに努力を続けたりといった、過程も大切に守らなければいけないということなのです。

保育園や保育士の不足で保育の質の低下が心配され、また戦後の諸制度の出発点となる憲法の改正が言われているいま、立ち止まって、こうした保育の歴史をたどり、理念を問い直す必要があります。私たち大人には、すべての子どもが豊かな日々を創造できるよう、力を尽くす責任があるのです。

★参考文献「日本の幼稚園」（上窪一郎・山崎朋子 著、ちくま学芸文庫、一九九四年）

中学生と一緒に考えた「戦争」

石川文洋

私は80歳になりました。2日前にベトナムとカンボジアの旅から元気で帰ってきました。こうしてまだ現役カメラマンを続けられることが嬉しいのです。私には、これからもカメラマンとしての夢があります。撮影したい対象もあるし、過去の写真を整理して発表したいとも思っています。

中でも、今回童心社から「報道カメラマンの課外授業 いっしょに考えよう、戦争のこと」全4巻を刊行できたことは、最大の夢が実現した思いです。それも、私の住む長野県の中学校で10回にわたり行った授業で、生徒たちに見てもらった写真と生徒たちが書いた感想を掲載した本になったことに、喜びを感じています。

私は年を重ねるにしたがって、これまでに見てきた戦争の実態を次の世代に伝えたいと思うようになりました。そのような時に声をかけてくださったのが、長野県茅野市北部中学校の両角太先生でした。茅野市には小学校9校、中学校3校があり、1988年から生涯学習を実施しています。その一環に外部講師による授業があります。2010年は北部中がモデル校なので、戦争について話してもらえないかとのことでした。私にとっては渡りに舟と、喜んで承諾しました。しかも、話の内容に制限はなく、どのような写真を見せてもよいと言うのです。この学校側の判断は画期的なことだと思いました。

私は諏訪地区3市2町村の高校教員の研究会で「学校は戦争教育に関して腰が引けている」と話したことがあります。沖縄や広島へ行って、地上戦や原爆で日本の民間人が大きな被害を受けたことを知るのも大切ですが、中国大陸ほかで加害者となっていたことも、もっと生徒たちに知らせるべきだと思っています。

「私が見た戦争」がどのように生徒に受け止められるか不安でしたが、毎回、学年の全生徒127人が熱心にスライド映写を見て話を聞いてくれ、まったく私語もなく飽きた様子も見られませんでした。1年生の時から卒業するまで4回講義をし、全校生徒にも1度話をしました。さらに別の学年に対して、入学から卒業まで5回の講義を持つことができましたが、生徒たちが熱心だったのは写真の力だったと思います。

アジア・太平洋戦争（沖縄戦を含む）を除く写真は、私が撮影したのですが、生徒たちにはすべてが初めて見る戦場や被害者の姿だったと思います。生徒たちに戦争を伝える機会をつくってくださった北部中の校長ほかすべての先生方、本を刊行してくださった童心社の皆様に深く感謝しています。

(いしかわ ふんよう／報道カメラマン)



1 戦争はどう報道されたのか



2 沖縄・戦いはいまでも続いている



3 ベトナム・未来へ語り継ぐ戦争



4 命どう宝 戦争はなぜ起こるのか

「報道カメラマンの課外授業 いっしょに考えよう、戦争のこと」

石川文洋／写真・文
茅野市立北部中学校／協力
本体価格 各2800円+税
セット価格 11200円+税

BOOK

よりどりみどりのいいとこどり!!



『かぶきやパン』
かねまつすみれ/作
長野ヒデ子/絵
本体価格 1300円+税

片岡明美

以前、とある写真アルバムを見せてもらったことがあります。それは、国指定の重要文化財、熊本県の八千代座でのお芝居の写真。八千代座といえば、私の主人、歌舞伎役者の片岡亀蔵も、度々その舞台に立たせて頂き、大好きな芝居小屋のひとつですが、その写真をよ〜く見ると、通常の公演とはどこか違うみたい。舞台セットは手作り感満載、役者の化粧も衣装もほのぼのしていて、みんな一所懸命に大汗かいて芝居をしていて、なんだかとっても楽しそうで……。

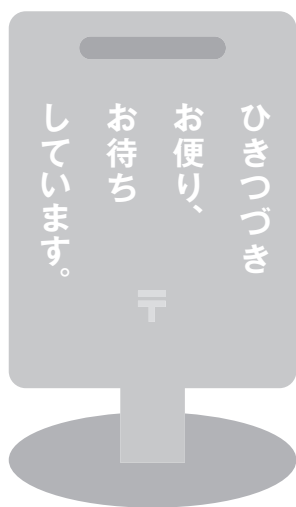
これ実は、長野先生はじめ絵本作家の先生方による「てくてく座」の公演！ みなさん普段からよくお芝居や歌舞伎をご覧になっていて大好きなものだから、ぜ〜んぶ自分たちでやっちゃえ〜！と、脚本・演出・大道具・小道具・役者も全て絵本作家のお歴々！ 驚くやら、可笑しいやら、衝撃的でした。

その伝説の絵本作家先生大奮闘「てくてく座」を彷彿とさせるのが、この『かぶきやパン』です。「助六」「白浪五人男」「外郎売」に「暫」「弁慶」と、子どもたちは勿論、歌舞伎通の方にとっても夢のようなラインナップで、よりどりみどりのいいとこどり！ まさに「三人吉三」の台詞“こいつあ〜春から、縁起がいいわえ”です。今にも大向こうから声が聞こえてきそう……「かぶきやっ！」
(かたおか あけみ/片岡亀蔵夫人)

読者からのお便り

●娘が生まれてからすっかり絵本にはまってしまっている私、昨年から読み聞かせを始めました。(略)最近は一歳の息子が、私のマネをして皆の前で読み聞かせを披露してくれます。まだおぼつかない両手を使っておはなしが始まるのです。題名の次には必ず「さく・えー」と付け加えるところが、とてもおかしく、始まりからほほえましく聞いています。これからも、子どもたちのおはなしタイムは大切な時間になりそうです。
(宮城県 N・N)

●「母のひろば」いつも楽しみにしております。作家の方々の飾らない言葉、作品とまたひと味違うメッセージに、ふっと心をとめて、想う・考える時を持つことができます。ありがとうございます。
(神奈川県 Y・T)



「母のひろば」へのご意見・ご感想のほか、子育てについて日々思うこと、子どもたちとの活動などについて、お便りをお寄せください。送り先は8ページ記載の童心の会へお願いいたします。

*お便りを誌面で紹介させていただく場合がございます。その際には編集部で選んだ絵本を一冊差し上げます。

4月の新刊図書!

おいしいともだち めろんさんがね・・

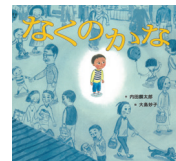
とよたかずひこ／さく・え
本体価格 850円＋税



お店から外に出かけためろんさん。するとねこさん、いぬさんがきて、めろんさんをごろんごろんしたんだって。めろん、ごろん……。

童心社のおはなしえほん なくのかな

内田麟太郎／作
大島妙子／絵
本体価格 1300円＋税



おとうさんとおかあさんとはぐれて、ぼくはこらえていたけれど。しらないどこかでひとりぼっちになったら……。迷子になった日の絵本。

怪談オウマガドキ学園 ②6 妖怪の出る時間

常光徹／責任編集
村田桃香・かとうくみこ・山崎克己／絵
怪談オウマガドキ学園編集委員会／編
本体価格 680円＋税



「逢魔が時」や「丑三つ時」など、魔物がよく出る時間があります。「時間」をテーマにした、こわ～いお話を13話収録。

おばけ・行事えほん めしくわめにようぼう

常光徹／文
飯野和好／絵
本体価格 1300円＋税



村一ばんのけちで、とんでもないよくばりの男がいた。そこに、うつくしいむすめが、ひょっこりたずねてきたが……。

怪談オウマガドキ学園 ②7 あけては いけない道工具箱

常光徹／責任編集
村田桃香・かとうくみこ・山崎克己／絵
怪談オウマガドキ学園編集委員会／編
本体価格 680円＋税



「今日はこれから持ち物チェックをする！」鬼丸金棒先生が言いました。「道具」や「持ち物」をテーマにしたふしぎな話を13話収録。

もつ演出効果により、絵本と比しても子どもたちがものごたりの世界に違和感なく没入していく様子が手に取るように感じられました。この本を通じて、紙芝居がもつ奥深さを改めて認識することができたので、今後も沢山の良作紙芝居を子どもたちに体験させてあげたいと思いました。
(北海道 S・K 三二歳)



単行本図書
紙芝居百科
紙芝居文化の会／企画制作
本体価格 1300円＋税

読者の声

第一子が三歳になったとき、御社の紙芝居舞台と拍子木をセットで揃えました。読み手(演じ手)と観客が明確に区別され、舞台などの

あとがき

- 入園入学進級の季節。人見知りの僕には、心細く落ち着かない時期でした。でも男の子に言語はいりません。仲良くなれそうな奴を見つけるべく、とりあえず足を踏んづけていました。いわば「遊ぼう？」というサインで、相手が芳しい反応を示してくれたら友だちになれました。人間関係がずっとそれくらいシンプルだったら楽なのにな、と思います。◎
- 今号から手づくり和菓子の連載が始まりました。家庭でつくるのは難しいイメージのある和菓子職人の世界では、洋菓子のようにレシピがあまり数値化されてこなかったんだそうです。おだんご先生こと芝崎さんが、科学的に計量して、誰でもつくれるようにしてくれました。シンプルなのでぜひお子さんと一緒に！ ▲

2018年4月15日発行(毎月刊)
母のひろば 第647号
定価50円(年600円/送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話: 03(5976)4187
03(5976)4402(編集)
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン: 谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけます。手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。

